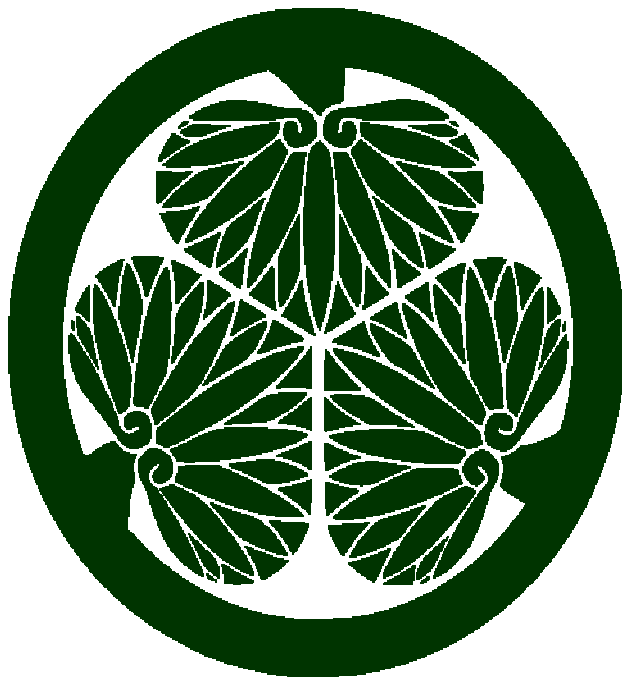


れいげん

大光山 霊源寺 寺報 第四号



発行：2015年3月

1

< 住職あいさつ >

東京でもそろそろ桜の便りが、届く頃でしょうか。当山のまわりにも、かむろ坂や目黒川など桜の名所がございます。花見とともにお参りすることもたいへん結構なことと存じます。

死に支度 いたせいたせと 桜かな 一茶
昨今、【終活】という言葉がもてはやされております。自身の葬儀やその後のお墓・相続に関して、遺される方々に一定の道筋を示しておく活動のようです。意義ある活動であると思います。自らの終わりを見つめる、つまり【死に支度】とは言い換えれば、いかに今を生きるかということではないでしょうか。あれこれと遺る方々に押し付ける終活ではなく、今の自分がなすべきことをなしていこうとする生き方が、とりもなおさず本当の終活につながっていくように思います。

あつという間に散っていく桜に、【一瞬一瞬を大切に】と問いかけられているようです。



(目黒川の桜)

2

< 浄土宗① >

宗祖法然上人のはなし④ (浄土宗開宗 編)

今回は法然上人が浄土宗を開宗するに至った動機となる苦悩のお話でした。

報恩蔵というお堂に籠もり一切経(仏教の全てのお経)を読み返し「我が身、我が心にあった法門」を探し求められました。

法然上人のおっしゃるところの「我が身、我が心あった法門」とは「凡夫が凡夫のままで解脱する(救われる)為の教え」のことです。

比叡山で学問第一と呼ばれたほどの法然上人ですが、いくら智識を学び、行を修めても成仏することの出来ない自らを【愚者】(凡夫)であるとし、それでもまだ【愚者】が解脱することができる教えがあるはずだと報恩蔵内の書物を何度も読み返されたのでした。そうして長い年月をかけ、ある書物に出会われます。

余談ですが、阿弥陀仏を祀る浄土の教え自体はすでに奈良、飛鳥時代には日本にも入って来ており、平安時代初期には遣唐使達が中国で学んだ念仏の教えを持ち帰り、比叡山において導入され、天台浄土教が興ったとされています。

現在の日本浄土教の大本となる念仏の教えを中国より持ち帰り、比叡山において導入、融合させた人物が自らも遣唐使の一人であり、第3代天台座主の【慈覚大師円仁】です。

(4項へ続く)

3

(3項より続き)

法然上人が苦悩の末に閉じこもった報恩蔵、そこに納められていた一切経も一部はこの円仁のような、遣唐使達が命がけで中国より持ち帰った書物と智識であったのではないのでしょうか。

現代は便利な世の中で家にいながら世界中の最新情報を知ることができ、読みたい本があればいつでも読むことができますが、当然のことながら当時は最新情報を知るには誰かが現地に出なければならず、本にしても印刷、流通の無い時代、読みたくても原本が一冊、後は自力で写さなければなりません。

そうした先達の大変な努力と精神の詰まった書物の眠る報恩蔵です。

勝手な推測ではありますが、追い詰められた法然上人がそこに籠もられた理由の一つにはそうした先達の想いのこもった場所に救いを求めるという気持ちがあったのではないのでしょうか。

余談のつもりでしたが、本文より長くなってしまい申し訳ございませんでした。

本文の続きはまた次回ということで、最後に観光案内になりますが、不動前にある目黒不動尊こと瀧泉寺は慈覚大師円仁の開基といわれています。

泰叡山 瀧泉寺

本尊 不動明王【目黒不動尊】

毎月 28 日の縁日は露天が並び

び多くの人々で賑わう。

東急不動前駅より徒歩 8 分

(次回も浄土宗開宗です)

＜霊源寺の歴史～博真閣編～＞

現在は納骨堂になっております【博真閣】について今回は書いていきたいと思えます。

現在の本堂は昭和 62 年に新築された建物で以後斎場として大いに利用されてきました。

お葬式の規模も現在とは違い、会葬者も多く非常に盛大で霊源寺の前の通りは向かいに火葬場もあることから喪服姿の方たちで一杯だったようです。

その為本堂の 2 階では通夜振る舞いの席が足りないということが多々あり、どうしようかと色々考えておりました。そして、エレベーター付きの建物をつくろうと現住職が発案し建築が始められました。

それが今から 18 年前の平成 9 年のことでした。

なぜ【博真閣】という名称になったかということ、、、住職の太田真琴・設計士の本間博、二人の名前を

一字ずつとってはくしんかく博真閣と名付けられたのでした。



(工事中の写真です。)

次回も博真閣編続きます。

◆行事予定

平成 27 年 3 月 24 日(火) 午前 11 時より

・春彼岸法要

平成 27 年 9 月

・秋彼岸法要 (日程は後日お知らせいたします)

◆編集後記

寺報作成も今号で 4 度目。毎号ギリギリで、締め切りが近づく頃には毎日夜遅くまでカタカタと作業をすることになってしまいます。毎回、完成日には次号こそは早くから取りかかり、締め切り直前になって焦るというような日々を送る生活とはオサラバだと決意をしているはずなのですが、喉元過ぎれば、、、という具合で気がつけばまた同じことを繰り返しています。次号よりは、このずぼらの輪廻から解脱する為に自分に何が必要なかを考えたいと思いました。

(中村 尚平)

◆次号予告

次号は平成 27 年 9 月の発行予定です。

〒142-0063

東京都品川区荏原 1-1-2

宗教法人 大光山霊源寺

TEL03-3494-1083 FAX03-3494-6319

Mail: reigenji@gmail.com

ホームページ: <http://reigenji.konjiki.jp/>

発行人/太田真琴